

アジア経済史 1.2.1

前近代の農業社会：中国

2020.12.3

Contents

1 中国の人口 1400～2000	1
1.1 前近代における「マルサスの罠」をめぐる議論	1
2 移住と空間	2
2.1 漢族の南進	2
2.2 辺境へ	2
3 小農経営	2
3.1 土地を持つ、土地を借りる、土地を耕す	3
3.2 労働集約的農業と商品経済の展開	3
3.3 市場の階層構造	4
4 近世の世界経済の中での中国	4

1 中国の人口 1400～2000

グラフを見ると、18世紀頃からに大きな人口増があった。一方で、全体の耕地面積は増えているものの一人当たりの耕地面積は減少している。前近代中国で、どのように人口増が実現したのか、増えた人口をどのように扶養したのかを見ていく。今回のような、技術的なブレイクスルーがない場合の人口増についてまず議論されるのは「マルサスの罠」だ。

1.1 前近代における「マルサスの罠」をめぐる議論

マルサスは技術水準の向上なしに人口が増えると一人当たりの生活水準は下がるとし、西洋と非西洋の人口増に対する生存戦略を次のように述べた。

- 西洋：結婚年齢を遅らせて事前に人口を（増えすぎないように）コントロールすることで生活水準を高く保つ。
- 非西洋：食糧生産を上回る人口増が起きると、飢餓、ひいては死亡率上昇によって事後的に人口が（生活水準が戻るレベルまで人口が減ることで）コントロールされる。

当時の中国では嬰児殺しが減っていることからも死亡率は低下していたことがわかる。間引きが生存戦略として扶養人口を調節する行為だとするならば、前近代の中国では人口が増えたにもかかわらず死亡率上昇によるコントロールがされなかった（別の方法で生活水準が保たれていた）ことになる。これは「マルサスの罠」に代表される18世紀以降の中国に対する見方に見直しを迫るものだ。

2 移住と空間

2.1 漢族の南進

中国で耕地面積が増加した主な要因は、移住と開発である。漢族がチャイナプロパーと呼ばれる地域を開発、居住したことで可耕地の制約が解消された。また稻のような土地集約的な作物が開発され、農業生産量も増加した。

2.2 辺境へ

以前は開発していなかった西側の辺境地域に移住できた転機となったのが16cの中南米を原産地とする大陸作物（新世界作物）の伝来である。新世界作物は小麦などが取れないような山間部でも生育可能であったため、食料供給の可能性が大幅に向上した。

15cあたりから辺境地域で新世界作物を生産しながら商品作物（木材など）を生産する、という新しいタイプの農業が発展した。フロンティアは「遅れた辺境地域」ではない。経済の中心地と結びつき、発達した商品経済が展開されたのである。

3 小農経営

一人当たり農地が小さくなる中で人々はどのように生存していたのか、マルサスの罠で言われるよう生活水準の低下はなぜ起こらなかったのかを見る。小農経営とは農業経営の単位が家族単位で小規模な農家のこと。一つの家族を単位として独立した農業経営が行われていた（小農社会）。小農社会は前近代の日本、朝鮮、ベトナムなどアジア全域で見られた。アジアの小農社会の

特徴は、「政治的支配層の大土地所有に基づく農業(地主が小作人を支配)」が見られなかった点である。

3.1 土地を持つ、土地を借りる、土地を耕す

1930年代は小作人や土地を持っていない農民の割合が大きい。一般に、小作農というと貧しい農民が仕方なく土地を失って小作になる、という状況を思い浮かべるが、ここでは必ずしも貧しい農民だけが小作農となるわけではない。この背景には土地処分の二形態がある。

前近代の中国では土地市場がとても流動的であった。土地所有には「売・絶売」と「典・活典」(土地を担保にして利子と収益を相殺する形で一定の金銭がやり取りされる)の2種類があった。土地そのものと土地の利用権を切り離して取引する、というそれぞれの市場が発達していた、というのが前近代中国の特徴である。土地利用権と土地用益権が独立していた以上、地主と小作は直接的には上下関係しておらず、小作人は必ずしも低い地位ではない。

では国家はどのような役割をもっていたか。同時代の西洋、近代日本などは土地所有権はその領域の統治を行なっている政府の法律によって支えられており、市民の土地所有権を法律によって担保していた。しかし、前近代の中国の土地所有権、土地用益権は国家に支えられていたわけではなかった。当時の中国の土地売買、土地用益権の譲渡では契約を役所に届けるような手続きは必要なく、立会人のような人間関係のネットワーク、契約書の連鎖そのものが所有権の正しさを担保していた(ブロックチェーンみたいな)。一元的な政治権力に契約を担保させるのではなく、社会的な所有権の連鎖、社会的ルールを共有しているコミュニティ内部で契約が行われていた(税を払いさえすれば誰が所有しようが国家は不干渉)。

3.2 労働集約的農業と商品経済の展開

一人当たり耕地面積が減少する、という条件のもとで増加する人口を扶養するには経営主体である農家は単位当たりの収穫量を増やすなければならない。棚田の開発、長時間労働などによって土地の生産性を上げる、ということが試みられた(労働集約的。技術的なプラトーがあった)。

また売れ筋のものを作る、ということが行われた(副業の成立)。17cにはすでに地域の自給自足は崩れていて多くの地域が商品作物を遠隔地域に向けて生産していた。繊維産業は特に商業化しており、全工程が市場取引によって緩やかに結び付けられていた。

3.3 市場の階層構造

末端の農民のいる農村と商業中心地を結ぶ縦のヒエラルキーと横の長距離交易がともに発達していた。地図に空間の中に一定の割合で階層上に市場が続

いている。

宋代以降、中国経済は加速的に市場化することによって市場町が増えた。こうした経済の市場化が一人当たりの耕地面積が小さくなっていく（マルサス的な圧力がかかっていく）中でサバイブし、生活水準を上げるための一つの戦略であった。

4 近世の世界経済の中での中国

大分岐、高位均衡の罠。2A でやったやつ。